



短歌世界にどう迫るか

—イメージを再創造する—

山梨学院短期大学講師 松野 洋人 まつの ひろと

第二学年の二期期末に「短歌を味わう」(p 54)という教材が設定されています。そもそもなぜ国語科で短歌を教材として取り上げるのでしょうか。詩や俳句も同様ですが、これらを鑑賞する力が劣っているからといって、「社会生活に必要な言語能力」に大きな不都合が生じるとは思えません。

では、短歌の教材としての価値、即ち短歌学習の目標はどこにあるのでしょうか。私は次の三点で考えています。

一つは、新しい学習指導要領においても強調されている「伝統や文化の理解・継承」という側面です。二つは、言語の美、とりわけ韻律の美を味わうという点であり、三つは、精選され集約された言語から短歌世界のイメージを再創造する力を養うということです。

1 教科書の扱いについて

教材「短歌を味わう」では、三首の短歌を取り上げ、その鑑賞の仕方について筆者が解説をしています。また、巻末資料として

「短歌十二首」(p 228)が掲載されています。

授業時間が僅少であれば、三首の鑑賞文を読んで「なるほど」と納得して終わることも予想されますが、ここでは、「短歌十二首」の鑑賞に、是非生徒自身の力で取り組みたいものです。前述した短歌教材の価値の三点目の実現は、この学習を抜きにして考えられないからです。

もし授業時数が十分に確保できないならば、鑑賞の観点を明示した「学習シート」などを用意し、鑑賞作業は家庭学習、授業ではその発表会を行うなどという形も考えられます。その際、グループ別に短歌を分担するとか、個人で取り組みせる場合でも各自の好きな短歌を数首選ばせるとか、方法はさまざま工夫できるはずです。

2 韻律の美を味わう

「韻律の美」については、声にしてこそ体感できるものですから、まず十分に音読させることが重要です。前号の「巻頭エッセイ」の

中で、歌人の栗木京子氏も「五音と七音のリズムは日本語ととても相性がよい。」と述べられています。五音と七音の繰り返しで構成されている短歌は、日本語の韻律の美を象徴している文学と言つてもよいでしょう。繰り返し音読させ、好きな短歌は暗唱させるのもよいと思います。生涯を通じて唇に残る一首になるかもしれません。

音読の際に留意すべきは、解説文の中で玉城徹氏も「休止」という言葉で指摘しているように、区切れ(意味のまとまり)を意識させて読ませることです。生徒たちは、指示をしなければほとんどの短歌を三句切れで読んでしまいますが、音読の段階から内容のまとまりを意識させておくことが重要なのです。

3 イメージを再創造する

短歌に限らず、文学の読みの学習における中心的作業の一つは「イメージを再創造する」ことです。

作者は、自らの経験や知識、想像力などを基盤に作品を生み出します。私たち読者は、その作品と対峙し、そこに表現されている言葉を手掛かりに、やはり自らの経験や知識、想像力を総動員して作品世界に迫ることになるわけです。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

「短歌十二首」所載の斎藤茂吉の短歌ですが、この歌を例に「イメージの再創造」について考えてみましょう。

まず、直接表現されている言葉を手掛かりに情景を描いてみるのです。死を間近にした「母」がいます。その母に「添寝」している

作者がいます。遠くの田からは「かはづ」の声が聞こえています。これらの確認によつて基本的なイメージは描くことができます。しかし、情景はまだ未完成です。「しんしんと」と「天に聞ゆる」の解釈が必要です。

「しんしんと」は、更けてゆく夜の静寂な気配と、遠田から夜気を通して聞こえてくる蛙の声調、さらには作者の不安や悲しみの心情までも伝えてきます。「天に聞ゆる」は、蛙の声が天から聞こえてくるということです。作者には、蛙の声がまるで母を遠い世界(天)へ誘う運命の声のように思えたのでしょう。

これで、「言葉」を手掛かりとした「イメージの再創造」は二応完結します。当然のことながら、読者は自分自身の経験や知識と短歌の言葉とを重ね合わせ、想像力を働かせながらイメージを創造するわけですから、その像が作者のそれと一致はしないのです。これは、読むという行為の本質的な性質であり、授業における読みにおいても留意する必要があります。

ところで、生徒たちを短歌世界により深く入り込ませたいというときには、言葉を手掛かりとした鑑賞だけでは限界があります。作者はどんな人なのか、この作品はどんな状況で作られたのか、そういうことについての情報を生徒たちに提供する必要があります。

例示の短歌について言えば、大正二年十月発行の歌集『赤光』所収の歌であり、同年五月、故郷山形において母の死を見送ったときの連作「死にたまふ母」五十九首のうちの一首です。

大正という作品の生まれた時代、五月という季節、山形という作品の舞台などから見えてくるもの、連作の他の作品から見えてくるものがあります。それらが再創造されたイメージをさらに豊かなものにしてくれるはずです。